

組織的なコンテキストにおける インシビリティおよび対人危害： STEM 課程における諸価値の定性的研究¹

竹 田 次 郎

原著 Rieger, A., Marder, M. A., Blackburn, A. M., Garthe, R. C., and Aber, M. S. (2023), Incivility and interpersonal harm in organizational context: A qualitative exploration of values in STEM training programs, *Journal of Community Psychology*, 51: 2964–2988.

-
- 1 [訳注] 先ず、訳者がこの論文を翻訳しようと思った動機を披瀝させて頂く。訳者は、本学で「リーダーシップ論」の授業を担当する者であるが、今日のテキストや論文を見聞するに、ハーシーらのSL理論をはじめ、フォロワー側に焦点を当てる研究に注目が集まっていることは間違いないと言えよう。実践的にも——特に今日、人手不足でリテンションに頭を悩ませている組織において——フォロワーに快く働いてもらうことは、組織のリーダーにとって重要な事項であろう。しかし、意識的にせよ無意識的にせよ、インシビリティやハラスメント的な言動をしてしまうことが、高パフォーマンスを求められる組織のリーダーにあって、往々にしてあり得る——少なくともフォロワーはそういう言動を受けていると感じている可能性がある。

この論文は、コミュニティ心理学の学術誌に掲載されたものであり、(通常マネジメント分野に括られる) リーダーシップ論とは直接関係の無い作品かも知れないが、リーダーとフォロワーとの関係の中でインシビリティが絡む事態につき、非常に示唆的な事例を提供してくれる。とりわけ、フォロワーがどう感じているのかをかなり赤裸々に語る引用文に富んでいるゆえ、ここからリーダーシップ実践に関して有用な知見が得られることと考えた次第である。

なお、拙訳の本誌への掲載につき、著作権等の問題なきことは訳者が確認済みである。また、ここでは本文のみの全訳としたが、参考文献などは、DOI: 10.1002/jcop.23078を参照されたい。

要旨

本研究は、^{サイエンス}科学、^{テクノロジー}技術、エンジニアリング、^{マセマティクス}数学（STEM）を専攻する大学
院生における、組織の価値観や、^{インシビリティ}粗暴な行為に関し感じているところを探究するものである。STEMの大学院生26名との面接から、インシビリティおよび関連する危害の事例や、それらに関し知覚するところを引き出した。生産性、威信、専門知、客観性、独立独歩、協働という価値が見定められた。それぞれには、有用と思われる側面（例えば、発見に火をつける生産性、学習を促進する専門知）もあれば、凶器化²されると危害につながり得る側面（例えば、長く仕事をしないでいた人たちを「見下す」という際のインシビリティ的な話にて生産性のことが出て来たり、知性に関する噂話をする中で専門知が出て来た）もあった。協働における一定の側面（例えば、長きにわたる仕事の関係が、科学的発見に火をつけること）は、支援的なものかも知れない。生産性といったような組織の価値が、幸福への慮りといったものにとって代わっているようであった。今のこういう価値的枠組みは、一定の参加者からは必要と目されていた社会正義やメンタルヘルスへの鋭意取り組みへの拒絶に、供しているのかも知れない。含意は、環境横断的に論じることにする。

キーワード：高等教育、インシビリティ、組織、粗暴、STEM、価値、職場での
いじめ

1. はじめに

インシビリティは、科学、技術、エンジニアリング、数学専攻といったような学術でのコンテクストを含め、一定の環境にて特段に広がりを見せる

2 [訳注] このような凶器化は、今日社会問題となっている、SNSでの誹謗中傷の書き込みに似ている。それを犯している本人は、正義感でやっているという。即ち、本人にしてみれば、何らかの「価値」の表明なのであろう。

(STEM; Burke et al., 2014)。こういった環境は、嫌がらせ、排他的行為、資源の取り上げを通じ、脇に追いやられた構成員に対して敵意的なものとなり得る (Marín-Spiotta et al., 2020)。インシビリティは、明確な意図を欠いた粗暴・非礼・無礼な行為で構成される。それは、低レベルでよく分からないものであり (Schilpzand et al., 2016)、「現代的な」形の差別なのかも知れない (Cortina et al., 2013)。遍在的であるという報告は為されながらも、組織にあっては、インシビリティを重要性が無いものとして捨象することが時としてある (Cortina et al., 2017)。数多くの悪影響がインシビリティに関係してくる。個人レベルでも (例えば、標的者や目撃者における怒り、悲しさ、創造性の減衰)、組織レベルでも (例えば、離職、組織コミットの低落; Cortina et al., 2022; Schilpzand et al., 2016)、然りである。「インシビリティ」は、文献でよく用いられる言葉である。とは言え、「インシビリティ」というのは、ネイティブ・アメリカ人種を「市民」かそうでないかと公式的に想定する合衆国の植民地の歴史をも指し、また、強制的な同化——つまり、市民とは文明人であるということ (Davis, 2020) ——の歴史をも指す。さし当たりここでは、この言葉づかいにおける緊張に留意する他の学者に倣い、「インシビリティ」を用いることにする (Cortina et al., 2022)。

コミュニティ心理学は長きにわたり、如何に環境が経験を形成し、抑圧や暴力を許容するのか、理解しようとしてきた (Nnawulezi et al., 2022)。インシビリティは組織の懸念事項として根づけした研究はいくつかあるが (Cortina et al., 2017)、インシビリティが組織の価値観や規範にどう関係し得るのか、いっそう深遠でコンテキスト的な理解を展開しないといけない。今般の研究にあっては、STEMにおける博士課程の訓練プログラム内の価値観が、どうインシビリティと相互作用するのかについて、検証する。ここでは、破壊的な行為または規範を犯す行為としてインシビリティを理解すること以外に、組織的なコンテキストを指し示すものとして、理論的にインシビリティを理解することに、傾注する。ここでは、組織の価値観がインシビリティにどう関係し得るのか、そして、インシビリティが組織文化の諸側面にどう橋渡しし、または実効化し得るのか、探究する。

1.1 組織内のインシビリティ：インシビリティの諸機能

インシビリティが如何ほど、また何故広まっているのか、更なる研究が必要である。インシビリティおよび関係する危害について、それらが起こる体系の中でコンテキスト化する研究は、根源的な原因の分析にいつそう整合的な問題の枠組み化に役立つであろう (Doggett, 2005)。コンテキスト化されたアプローチを欠く中、学術界におけるインシビリティ研究は、ほぼ大抵、居眠りから威嚇的な暴力まで、教室における「悪行」を報告するものになっている (Burke et al., 2014)。学生のインシビリティに関する調査研究が示唆するところ、特性が「ソサイエタル・エクスペクテーション社会的予期」と対立する教員を学生は標的にすることが比較的多い (Burke et al., 2014)。だが往々にして、環境特殊的な考察が為されていない。結果的に、教室のインシビリティを改善するための提案が、個人の変化に焦点を当てるものになっている——例えば、「冷ややかな [STEM] の雰囲気的特点に取って代わり、学習者の成功に向けた教員の情熱・熱意が無いといけない」 (Christe, 2013, p. 25) ということになっている。こういう類の考察は、個人の粗暴な特性を強調し、社会的生態系の考察の排除につながる。対照的に、インシビリティは、ある個人を超えて拡がる制度的特性を映し出す、組織の価値観から駆り立てられる一連の「非プロフェッショナル的な」行為だと見做されることはあり得る。例えば、クライアントに手荒な扱いをする、低業績ゆえに同僚を辱める、はたまた、嫌がらせや差別をはたらくというのは、権力の力学やヒエラルキーが頑として存在していることの反映であり、また、特定集団には権限委譲が無いことの反映であるのかも知れない (例えば、Abate & Greenberg, 2023)。

インシビリティは、個々人の行動を超越し、集団の実践に根付いている組織の諸現象だという風に認識する——研究者らもいた (Cortina et al., 2017)。例えば、経営的实践から、従業員がインシビリティをはたらく予見はし得る (Tuckey et al., 2022)。インシビリティが普通にある、または、集団がそういう行動を許容しているとある者が考えているなら、犯す蓋然性が比較的高い (Segrist et al., 2018)。インシビリティをはたらくリスクの要素としては、心身

上の幸福の状態、職務態度、職務的要請、チームワークないしチームの雰囲気の不味さもある (Park & Martinez, 2022)。インシビリティを理解するには、価値というものを含め組織文化が重要だと示唆する著作物もある (Cortina et al., 2017)。インシビリティおよび関連する危害 (例えば、はっきりとした粗暴) に関する古典的な定義は、「市民」的な行動規範を犯している、ということである (Andersson & Pearson, 1999)。何かすべきでないことをしている (例えば、教室での居眠り、仲間への軽蔑的な発言、仲間の無視) なら、粗暴だと知覚される。しかし、ある環境が許容している規範や、促進している価値に関して、インシビリティは何を映し出しているのだろうか。最近の研究によれば、インシビリティは、その受け手にとって教示的ないし情報含みである可能性がある (例えば、ある従業員に対し、振る舞い方を変えるべきだと発信するため、顧客が為すインシビリティ; Matthews et al., 2022)。しかし、インシビリティと組織の価値観とがどう交差するのかは、依然、未検証である。

1.2 コンテキストにおけるインシビリティについての理解の深化：組織の価値観とインシビリティ

インシビリティを探究するにおいて、コンテキストや人間同士のやりとりをも加えて相互的に考察すれば、個々人の相違に注目するインシビリティの枠組みが拡がり (Taylor et al., 2022)、また、抑圧 (例えば、人種差別、障がい者差別、性差別) がインシビリティ (Cortina, 2008) や対人危害 (Nnawulezi et al., 2022) にどう絡むのかの検討に、付け加えるところがあろう。他の形の対人暴力に関する研究も、環境特殊性への洞察をもたらし、それがインシビリティ研究に当て嵌められるという可能性がある。対人暴力の研究には、例えば、様々な個体群が如何に意味を形成しているのか (Sokoloff & Dupont, 2005)、加害において価値というものが如何に現れ得るのか (Peralta et al., 2010)、集団内において如何に介入が仕立てられるなり創出され得るのか (Yoshihama & Tolman, 2015)、というものがあった。シュウォルツが定義づけるように、「価値とは、(1) 信念である。それは (2) 行動についての望ましい最終的状态ないし型式に関係する。そしてそれは、(3) 特定の環境を超越し、(4) 行動、人間、事

象の選択なり評価の指針となる。また、(5) 価値的優先性の体系づくりをすべく、他の価値との相対的重要性による順序がある」(Schwartz, 1994, p. 20)。このようにして、価値が個々人によって内部化されるのだが、共通の規範や文化を反映している可能性がある。個々人が違った風に価値を内部化しているかも知れない(例えば、ある個人にどういう「正義」が動機づけになるかは、その兄弟姉妹にどういう「正義」が動機づけになるかとは、かなり違うであろう)。価値の内部化(即ち、自身の中での価値の解釈の付け加えを含め、こうした社会的ないし共有的な信念を自分自身のものにすること。ある人物を外因的に動機づける外的なものから、より内的ないし内在的に動機づけるものへと、価値を変えること)が、社会化の重要な一到達点である(Grusec & Goodnow, 1994)。

(ある集団ないし個人向けの)価値だけを以って、加害(例えば、暴力をはたらくこと; Lee & Ousey, 2011)を予見することは出来ないが、価値を理解することは、ある環境における文化を浮かび上がらせるのに供し、組織文化およびインシビリティの総合的な理解に、また、予防的実践に有用であろう。インシビリティは、組織を包む性質ないし目的を示すもの(あるいは、「^{インディケーター}価値表現的な行為」; Bardi & Schwartz, 2003)なのかも知れない。これが本稿の問題提起である。所与の行動ないし遂行をすべきという規範が強ければ強いほど、価値というものが関与している蓋然性が高いであろう(Bardi & Schwartz, 2003)。よって、本稿で探究する価値たるや、所与の組織的なコンテキストの中でインシビリティや関連する危害についての日常的な話において登場する価値、ということである。

1.3 価値およびインシビリティについて洞察性ある報告者たる、STEM大学院生

大学院生たちは、複数の行為者(学部生、大学院生、職員、教授)とのやりとりゆえに、また、訓練生としての地位(即ち、組織の規範や価値を学び、それらに合わせる事が、役割の一部としてある)ゆえに、学術界でインシビリティを観察し、それに光を当てるにおいて、独特の位置づけにある。だが、彼(女)らのインシビリティの経験は未探究である。(例えば、STEMにおける)大

学院生、という部分集合を以てすれば、価値とインシビリティとの間にあり得る関係性について、比較的明瞭な絵がもたらされ得る。こういう絞り込みは必要である。総合大学という所は広域的であり、単科大学に比べると専攻間の横串があるという特徴があって、単一の組織文化を以て特徴づけるのが最善ではないような、そういう環境 (Silver, 2003) だからである。STEMは、よく十把一絡げにされ、「冷ややかな」雰囲気だという風に描かれてきた (Christe, 2013)。インシビリティおよび対人危害の研究は、如何に、何故、という問いに対し概説するのに役立つであろう。よって、STEM大学院生数名における、インシビリティおよび関連する危害の経験・知覚を探究することは、価値およびインシビリティの研究の位置づけとして、知的に豊穡かつ実践的な場となり得る。

1.4 今般の研究

これは、価値についての定性的研究であり、そしてまた、インシビリティおよび関連する危害に係る、STEMの大学院生の話や知覚するところにおいて、価値というものがどういう風に現れるかの定性的研究である。インシビリティは、大概、クロス・セクションで研究されており (Cortina et al., 2017)、定性的研究はあまり活用されていない (Schilpzand et al., 2016)。定性的研究を以てすれば、インシビリティが如何に起こり、如何に解釈され、ある環境において如何に拡がるのか、明らかに出来る。ここでは、社会構成主義的なレンズを使い、STEMの大学院生に面接を行なった。参加者は、インシビリティ (即ち、よく分からない粗暴) の話を、加えて、インシビリティの定義には合わないような対人危害 (即ち、はっきりとした粗暴) の話を、しばしば語った。筆者らは、そういうものとして、「インシビリティおよび関連する危害」と大抵は書いている。例えば、よく分からない粗暴およびはっきりとした粗暴は、識別できる構成概念であるのだが、予防主義者らや研究者らは、もっと広く、インシビリティとセクシャル・ハラスメントとの間を含め (Cortina, 2008)、諸々の危害の「点と点をつなぐ」べきだと主張する (Hamby & Grynych, 2013; Wilkins et al., 2014)。筆者らのリサーチ・クエッションは次のとおりである。価値とは

何か。大学院生はその価値を如何に使用しているのか（または、他者による使用をどう感じているか）。インシビリティおよび関連する危害の話の中で、価値はどんな風に登場するか。インシビリティおよび関連する対人危害は、組織の価値観とどういう風につながり得るのか（例えば、組織の価値観の凶器化としてのインシビリティ）。

2 手法

2.1 参加者

参加者は、米国中西部のR01の大規模大学に所属するSTEMの博士課程大学院生26名（中央値27.4歳、標準偏差5.59年）。女性14名（53.85%）、男性11名（42.21%）³、どちらでもない1名（3.85%）であった。3名（11.54%）がトランスジェンダー、10名（38.46%）が性的マイノリティ（即ち、異性愛以外の性的志向）。15名（57.69%）が有色人種（黒人23.08%、東アジア人15.38%、7.69% 東南アジア人、南アジア人3.85%、ネイティブ・アメリカン3.85%、ネイティブ・ハワイアン3.85%）、5名（19.23%）が白人、6名（23.08%）が混血であった。9名（34.62%）が自然科学、8名（30.77%）が物理学、7名（26.92%）がエンジニアリング、2名（7.69%）がコンピュータ・情報科学を専攻し、2名（7.69%）が別途のプログラムに属していた。ほとんどが3年から7年目の間であった（69.23%）。

2.2 参加者集め

本研究は、STEMにおける対人関係の研究として募った。その案内は、本研究チームから各専攻のリーダーに送り、そこから、各専攻の電子メール・リストへと情報を共有してもらった。そしてそれをベースに、本研究の参加者候補は自薦とした。彼（女）らには、同意書および属性を書いてもらった。属性は、

3 [訳注] この数字は、原文のままである。

多様なサンプルを（例えば、性別、人種、障がいの有無を以って、また、複数の被差別的特性が交差していることに留意して）選択するために用いた。面接参加者への謝礼は、アマゾン金券30ドル分とした。属性を書いてもらったが、面接には入ってもらわなかった人たちには、30ドル分の金券で、三分の一の籤引きとした。

2.3 面接

6名の心理学専攻の大学院生に、練習面接を行なうか見るかした後、約60分間の半構造化面接をZoomでやってもらった。各面接者は、1乃至7回の面接をした（中央値4.5）。面接は、STEMにおいて「あなたの感情を害し」得る事柄の例や、総じてSTEMの人たちがお互いにどういう扱いをしているのか、引き出すものであった（サポーティング・インフォメーション・マテリアルズ支持的な情報資料を参照）。価値については、参加者にはっきりと述べてもらうことはしなかった。価値については、話や振り返りから全体的に拾い上げていくことにした。ストーリーテリング語りというのが、個人や集団の価値観を理解する一手段である（Kenter et al., 2015）。2名の研究助手が各筆記をチェックし、コーディングする2名（筆頭、第二筆頭の著者2名）は、分析のためデドゥース（Dedoose, 2021）を活用した。

2.4 分析

コーディングにあっては、反復的な実践知のフロネティックアプローチをとり（Tracy, 2019）、ここでの価値の探究が宿る、より広い調査研究に向けたコーディングを含めることとした。第一に、より広い研究に向けた広い先験的アプリアリコーディングとしては、文献および面接で出てきたものをベースとした（例えば、「STEMにおける規範」、「インシビリティの例」）。コーディングの復習において、6名の研究者がコードのデータ化を開始し、コードブックとして総意に至った。先ずはこのアプローチにて計6回の面接をコーディングし、そしてコードブックを改めた後に再びコーディングした。最終的な価値のリストを含め、コーディングの最中に提案されたコードもあった。価値の見きわめについては、既存の価値の枠組みなり「普遍的な」価値を当て嵌める（例えば、Schwartz et al.,

2012) よりも、価値がデータから見きわめられるような、地に足の着いたアプローチをとることとした (Charmaz, 2009)。筆頭の著者は、コードブックづくりを率い、筆頭および第二筆頭の著者 2 名は、あらゆる筆記にコードを当て嵌め、週次で会ってコードやサブテーマを論じた。こうした議論には、価値についてのコードの創出が含まれたが、それらは、先験的に形作ったものではない。次に、筆頭の著者が価値のコードをすべてコーディングし、価値のコーディングを論じるべく、第二筆頭の著者と週次のミーティングなど定例的なコミュニケーションを持った。分析全体にわたる議論から、更に深いデータへの取り組みにつながった (Church et al., 2019)。

3 結果

本研究にて、7 つにわたる価値を見いだした。生産性、協働、威信、専門知、客観性、独立独歩、健康である。これらの価値それぞれの中で、プラス的特性・マイナスの特性が現れ、こうした価値が、インシビリティおよび関連する危害の話の中でどういう風に現われるのか、諸例を見いだした。表 1 を参照されたい。価値同士の交わりが、ニュアンス的な洞察をもたらしてくれる。

3.1 生産性

生産性という価値は、最も頻繁に説明される価値として現れたし、STEMでの生き方に関するほとんどの話の中で登場した。本節では、生産性の価値について次のとおり探究する。我々のデータにおいてそれが遍在的であり、それに関連して、他の価値以上に生産性が上に来る可能性があるということ。また、生産性について、2 つの異なる解釈ないし内部化があるということ (即ち、発見に火をつけるため生産的であること。対して、生産性 (と見られる) ために生産的であること)。更に、生産性と、関係者の健康・幸福との関連。加えて、STEMの大学院生にあって、特にこの価値の社会化が重要たり得ることである。

表1 価値、インシビリティおよび関連する危害、社会正義の結びつきの例

価値	インディケータの例	プラス的な特性の例	凶器化の例	社会正義への妨げとして活用される例
生産性	研究の生産性の存在・重要性	科学への貢献の希求	研究時間が僅少な他者への「見下し」	科学以外の任務の無視
威信	プログラムのランキングの重要性、自身の評判(例：生産的であるとか、専門知がある)		オリエンテーションで学部での成績を聞くことで「人を値踏みする」	生産性との関連性ゆえ、社会正義に時間を全くないし殆どとらない
専門知	知識を示すための(ペーパーその他の)テスト	(個人的に、また、「専門家の」支援を以って)学び、成長するという希求	知識が僅少だとか、技術的能力を欠く他者について「噂話」をする	社会正義を論じるまでもなく十分に賢者であると仄めかす
客観性	「主観的な経験」より「動かぬ事実」を是とする	適切な場合、科学的手法への忠誠	他者が学術的に間違っていると認識される際、「手厳しい」ないし粗野なコミュニケーション	社会正義の議論は、正解が1つにならないかもしれないことを理由に、拒否する
独立独歩	研究の独立性への期待	適切な場合、独立性あり	独り立ち出来ない学生への支援を留保する	(身体障がい者に対しても)支援しない
協働	科学とはチーム・スポーツだという表現	チームワーク	協働の関係が加害を継続させる必然性を引き上げる	
健康	リーダーによる院生の健康チェック	ケア	健康を生産性に結びつける(例：健康なら良い研究ができる。良い研究をしていれば、健康になれる)	

注：更なる例についてはテキストを参照されたい。はっきりとした例を見いだせなかった場合、空欄にしている。「プライド」なり「チーム帰属意識」が威信に結びつくプラス的特性であり得るかどうか、筆者らは逡巡しており、加えて、意図せざる結果も目にする可能性がある(すべての価値について、意図せざる結果が存することは留意している)。関係を維持する必要性(例えば、差別を続けること)が、協働に関わる社会正義への妨げになり得るか、筆者らは逡巡している。

3.1.1 遍在的で、結合させる価値としての生産性

このコードに含まれていたのは次のとおりであった。締切の存在および重要性。良い研究とは、(a) 成果物であり、(b) 調査なり科学を進展させる一部であるがゆえに、良い研究すること。時間を科学に捧げること。生産性のプレッシャーゆえ、研究内外にて柔軟な時間があまり無いこと。そして効率性である。対人能力は劣ってはいるものの、研究成果ゆえに良い科学者だとして教授を尊敬する大学院生も中にはいた。

生産性は、専門職的に有用であると同時に、対人危害に関してはリスク含みであると思われる経験に、関係していた（例えば、生産性のプレッシャーの結果、対人関係について慮る時間があまり無かった）。次の院生（20）は、STEMの中で絶えず彼（女）らの中で生ずると感じるプレッシャーに対し振り返り、如何に生産性が「有用」にして「リスク含み」であり得るか、明らかにしている。

「良いフィードバックも、成功に関して褒められるようなことも、ほぼ…無いですね。そう思います。色々なSTEM〔分野〕の人を知っていますが…多くは同じように感じています。うーん、それは…終わりの無い、終わらない目標ですね…そんな風です。『ああ、論文を出したの。次の研究計画は何？ 次の論文はどんなの？』と。…だから、十分な出来だという感じにはならないです。…『よくやった。この調子で』…というのではなく、『もっと、もっと、もっと良いのは何？』といったようなのが常です。」

生産性は、STEM共同体をまとめるような価値として現れてもいた。例えば、ある院生（10）は、教員と大学院生との間で、対人的振る舞いの相違があるかどうかについて答えていわく、「このことは興味深いです。つまり、ある意味、違うとは言えますが、全体的には…同じ目標が[皆に]ありますね…プロジェクトの完遂…何かを成し遂げることです」と。参加者との面接にあって、生産性の重要性を更に強調する別の院生（5）の見解としては、生産的であることや、生産的であると目される（例えば、「私が研究していることに価値ありとされ

る」) なら、そのことが、人に対して無作法なSTEMにあって、^{バッファー}緩衝材になる可能性がある、ということであった。「私のアドバイザーや仲間には、私の行なっている研究の価値のようなものを分かってくれています。ですから、私にとって本当に大事なのはそれだけだ、という風になっています」と。

3.1.2 何より生産性という価値を優先にする

科学における生産性や、プログラムの生産性が、例えば幸福よりも如何に重要だと想定されるかについて、参加者らは多数の例を挙げた。ある院生 (71) は、「院生生活をする¹と決めたなら、院生生活をするということ。それだけです。他の類のことは出来ません。こういう文化があると思います」とまとめてくれた。別の院生 (79) は、別の教授から嫌がらせを受け、そのことを知ったアドバイザーの反応を述べた。

「アドバイザーが私に尋ねたのは…『このことが君の論文に影響するのだろうか』ということだったと記憶します。そして…『このことが君の論文に影響しないように、君は出来るか』というようなことも。それで、かなりはっきりとした感じで…『我々はこのことを直ぐに無視できるか』…『このことは、如何ほどの問題にならないといけないのか』と。基本的に、[加害者は]私たちの教授にも問題を引き起こしているのですが。」

この院生は続けて、生産性に対して如何ほど影響があり得るかが、対人危害が如何ほど問題なのかについての物差しだ、と述べた。「ですから、それは、研究の仕方だとか、生産性の度合いに影響することなのです。で、もしそうだとすれば、問題だということです。しかし、まだあれもこれも出来るのであれば、そういう大きな扱いにはなるべくありません」と。その参加者に、粗暴といった対人的行為が、STEMにて許容される一線を越えるのはどういう所か、と尋ねたところ、「まあ、思いますけれども——そしてこれが問題でして——比較的公式的に引ける一線としては、『それがあなたの研究に影響するか』というような所です」と述べた。健康が生産性よりも価値が低い故に、対人

的危害かも知れない事柄を無視する、という院生らの意思決定の仕方は、海外からの院生の話の中で特に際立っていた。下記は、このことの理由について、ある留學生が説明する理由である。

「私は異国からここに来ました…学び、研究するためです…それが私にとって一番の優先です。私は、ここの市民でない…[ですし、]永住するわけでもありません。ですから私は…他のことはあまり気にしません…仮に…何か事が起これば…学ぶのをやめて帰らないといけません。まあ、ここで過ごした日々が無駄になるのです…そして…教員と学生との間のことであるなら、私なら二度考えるでしょう。何故かと言いますと、私など…先生が常に正しい、というルールに従っているわけですし…また…それが自分の将来にどう影響するか、ここでの自分の勉強や研究にどう影響するか、というようなことを考える必要があるからです。」(47)

STEMにおけるインシビリティを減じる必要性を述べる院生もいた一方で、「少々」も含め、インシビリティを懸念事項と知覚しつつも、必ずしもこういう行為を変える必要は無い、と語る院生もいた。健康よりも生産性を暗黙的に重視することについて、ある院生(8)が要約しているように、「ええまあ、この分野で感じるのですが…それを善処する必要は無いです…善処された方が良いのですが、この分野の…持続的な発展のためには必ずしも要りません。」この院生は続けて、生産性という価値を擁護した。

「そうですね、うーん、そういう有名な教授が、学生に向かってそんな[粗暴な]風にする理由は、ある程度わかります。まあ、そうしないといけないのじゃないでしょうか…引き続き論文を出し、予算も得たいです。…十分な時間が無いとしたら、本当に厳しいですよ…ですから、まあ思うのですが、どう善処できるかは分かりませんね。」(8)

3.1.3 生産的という見栄え：生産的という見栄えのために勤しむ

生産的であることは非常に高い価値があるわけで、彼（女）らの研究が進展なり成果物に帰結しようがしまいが、勤勉だと見られようという動機づけになっているようであった。得てして、努めて研究したいという希求は、それを結果と直接結びつけること無しに、述べられていた。院生たちは、一見、生産的でありたかったのである。「生産的に見えること」のためであるとか、見た目の勤しみのために研究することが、その努力に比較的直接的に関係する何か（例えば、発見、貢献）を達成すべく研究することよりも、生産性のサブテーマとして共通して現れていた。発見や科学的貢献を追求したいがために、生産的たることを希求する例としては、「[私のサブフィールドでは] 皆この点について一緒です… [私たちのサブフィールドを] もっと良くしたいのです」(14) というのがあった。対照的に、研究していると見られるため研究する、という振り返りの中において、粗暴性、インシビリティ、対人危害についての思考が見られた。

「ですから、これがSTEMのことなのかどうか分かりません…けれども、どのくらい研究しているか…地位の象徴です。なので、週7日研究する中で、10時間の日、12時間の日、というのを自慢するのです。それで、誰よりも研究する人たちは、比較的よくやっていると感じているのだと思います。『ああ、自分はもっと賢明に研究しているよ。だから自分は…君らをどうにでも出来るのだ』という風に。それで思うのですが、そういうこともあって…間違いなく、全く以って粗暴な人たちがいる[STEMの中で]、こんなやりとりになっているのです。」(20)。

長時間の研究が地位をもたらす筈だという考え方に、抵抗する参加者もいた。例えば、以下の引用は、(a) 研究と (b) 良い研究の創出との違いを明らかにしている。

「だから、我々の居る建物は、眠ることが無いのです。午前 2 時に行け

ば、そこに院生が居ます。…そしてご存じのとおり、まあ、単にたくさん研究したからと言って、長時間だからと言って、成果を早めるわけではありません。お分かりですね。何かにもっと多くの時間を要するとするなら、何らかのこともっと上手くやってみることでしょう。しかし、来る日も来る日も13時間、12時間研究すると、まあ、燃え尽きるでしょうね。また、長い目で見たら、何を為すことが期待されているのか、疲れている時は、はっきり分かることさえ出来ないでしょう。そんな風です。」(11)

3.1.4 生産性と幸福、関係の健全性

生産性というものが突出していることに鑑みるに、それが幸福に関係していると知覚している参加者の中にはいたことは、恐らく、驚くに値しない。

「[仮に] 生産性が低いなら、間違いなく気分が悪いですよ。…またとりわけ、先生に叱られたり…何か[厳しいことを]言われたら…間違いなくそれでもっと気分が悪くなり、その時はもう生産性が上がりません。つまり、ある種、二重の効果ですね。」(47)

そしてまた、幸福の無さは、インシビリティ含め、対人危害をはたらくということに関係しているのかも知れない。例えば、インシビリティの事例としては、生産性という価値に橋渡ししようというものがあり（つまり、バリュー・エクスプレッション・ビヘイビア「価値表現的行為」; Bardi & Schwartz, 2003）、また、生産性上の要件が圧倒的であることの副作用と言えるものもある（つまり、「暴言」）。

「[STEMにあって、インシビリティが、一部、常態であること]について、思うのですが、部分的には文化の問題でして、何故かと言いますと、私たちが教授にかなり多くの責任を押し付けているからです。それで教授は、意図せずして…無配慮になるのでしょう。ですが、教授はかなりのことを抱えているので、物を忘れてしまうとか、院生に…急いた物言い、無思慮な物言いをしてしまうのです…うーん、[例えば生産性上の要件を満たす

のに」精神的な強さはかなり「必要」ですから、ええ、本当に精神的状態が不味いなら、思慮的になるのは難しいでしょう。そう思います。」

参加者らは、幸福というものを論じるにおいて、それを、生産性への有用性という枠の中に収めることが多かった。例えばある院生（97）は、「より心身ともに健康な院生は、より生産的な研究環境を促進する、と思います」と述べた。別の院生（62）は、「本当にこの分野について、そしてその進展について気にかけるなら、居心地の好い場所の確保が全く以って必須です」と語った。別の院生は、幸福と生産性との関連について、同じような表現をしていた。そういう例からして、必ずしも参加者全員が、課程における生産性重視について否定的な見方をしているわけではない、ということにもなる。

「概して「専攻の」教授は…我々が心おきなく好い研究が出来るように…非常に適切に、確実に我々に気配りしてくれます。まあ、我々がどう感じているか、我々がどんなふうに行っているかが、直接我々の研究に影響するでしょう…ですから、我々が気かけられる存在になっている、そのことが確保される…それが好い科学的コミュニティというものだと思います。」
（9）

3.1.5 生産性とインシビリティ、生産性という価値への社会化

生産性の妨げとなる行為が、参加者たちから、粗暴ないし粗野と解釈されることが多かった。例としては、他の者が、チームの実験機器を綺麗にしない、時間どおりに作業空間を離れない、予定よりも研究が遅れる、というのがあった。また、他の者の研究時間を知ったことに基づいて、その人を軽蔑するSTEM院生が居る、という例を語る人たちもいた。ある院生（11）は、「1日に12時間、13時間研究しないと、まあ文字どおり見下されるでしょうね」と述べた。別の院生（71）は、「周りの人たちは、『私みたいに研究できないから、君らはここに所属できないのだ』と考えています。…で、思いますけれど、それは、それは、本当に大きいことで、その24時間7日、急かされる文化を実践で

きないなら、そういう感覚では、ここに属していないということです」と言った。

面接にあっては、インシビリティが、生産性という価値を伝え、促進する手段であるという例があった。例えば、如何ほど研究しているか、また、その進捗をめぐって、アドバイザーから粗暴と言えるような非難があったことを、ある院生が振り返っている。

「[私のアドバイザーが非難するより前] 私は、熱心に研究しているものと思っていたのかも知れません。ところが、実際にはそうではなく、基準を満たしていないのです。…ですからこういう場合、私には本当にプレッシャーでして…目覚まし時計みたいなものだと思います。…なので、それが単純に悪いことだとは思わないのです。積み重なれば何らかの副作用はあるとは思いますが。まあしかし、公正に言って、悪いことではないと思います。また時として、その基準を持ち出すのは、そして、[STEMの博士学位が] 簡単だと思われてはならない、という教示は、全く必要ですらあり、そのことは、より真剣に取り扱って然るべきなのです。」(1)

下記のとおり、ある院生(20)は、生産性の社会化を強調しつつ、多くの時間、研究していると公然と見做されていない場合、他の院生からの評価が怖い、ということを述べている。この院生は、課程における生産性観について、自分たちの幸福を害し得るという風に内部化していたようである。STEMの大学院生にあって、この価値の解釈の仕方には個別的に違いがあることも、この引用から明らかである。その内部化の性質が、上記(1)とは対照的だからである。

「もし私が研究室におらず家で研究している一方、他の人がいつも研究室にいたとしたら、自分がくずみたいに感じるのです。また、私は、アドバイザーから外的なプレッシャーを受けさえしていないのですが、それでも、自分が怠け者、怠け者などという風に人から思われぬように、もっ

と研究すべきだと感じますね。怠け者ではないとしてもです。自分もそんな風に感じたくないですね。」(20)

もう 1 つ。次の参加者は、生産的かつ（または）熱心な研究者像という重要性を強調しつつ、インシビリティの例を述べている。それは、研究室のミーティングにて、発言が無視される学生が居る一方で、「より量産的な」院生による同様の発言は注目されると感じられる、という例である。

「私はこういう院生に気付きました…多分、比較的量産的で…研究量が多く、そうすると教授はそういう人たちに注目するでしょう。また、我々も同じようなことを言うのですが、私の発言などは無視されるでしょう。…そういう人たちの発言が…教授が考える[そして語る]事柄なのでしょう。」(62)

生産性というものは、研究を見下すといったように、院生を対人危害の標的にする手段として、登場していた。例えば、多くの院生は「肌の色」ゆえの特別扱いを求めており、生産性を引っ張り出すことで、こうした院生を標的にする口実にしている、という考え方を、ある院生（32）は表明した。「行動様式…そして、人の知識や特徴が、真に大事な事柄なのです。ええ、ご存じのとおり、生まれつきの、どうしても良い特徴ではないのです。」この参加者の言葉そのものは、面接で表明されたとおり、インシビリティの例かも知れないということで、コード化した。

3.2 協働

生産性に次いで重要なものとされる価値は、協働であった。本節で探究するのは、協働という価値である。つまり、それがインシビリティに対してどう防御的になり得るか、加えて、それが持続的な加害を促進するためにどう利用され得るか、ということである。

3.2.1 普通のものとして、また、防御的たり得るものとして見定められる協働

協働は、生産性に重要だという風に述べられることが多かった。独立独歩という価値を是とするのは、協働という価値ほど登場することは無かった（下記の議論のとおり）。協働としてコード化した回答としては、科学はチームの努力である、相手を助けることは良き仲間なら行なうことだから重要である、という表明や、科学の人間の要素や、社会的立場たる「科学者」について省察（例えば、情緒、関係性、共同体的目標を評価する重要性）があった。実際、ほとんどの参加者が、STEMにおける協働の重要性について、何らかの形で是としていた。

「[我々に好ましい環境づくりにおいて] 決定的に大きかった[事柄]は、私の教授が、私たちの味方となろうとしていていたことです。私たちが彼の下にいるという感覚を、彼は望んでいなかったのです…それが普通でして…[教授は] 私たちを部下…というより同僚と考えて…私たちは平等の扱いを受けています。」(13)

協働は、例えば、専門知という価値の凶器化を防ぐことにより、防御的な様相があった（以下の議論）。

「私は概して、協働的な雰囲気醸成を考えていまして、それが、相手の粗暴さを決定的に減衰するのだと思います。何故かと言いますと、そういう人達は、恐れていないようでして…まあ多分、粗暴な人たちの何人かは[何故そんなことをするかというと]単に、相手よりも劣っていると見られたくないからですね…もっと協働的な雰囲気が醸成されれば、多分、大抵の人たちは粗暴的にはならないでしょう。そうしたら、『ああ、彼らはどうしているか、そして、彼らはどういうことを俎上に載せるか』が、本当に見えてきますよ。」(5)

幾人かは、協働者として、粗暴でないことの重要性について語り、やはり、

協働ということや、協働者がお互いに分かっているということが、STEMにおけるインシビリティ防御になり得る、と示唆していた。

「分かりませんが、誰かには、大発見の論文があるかも知れません。そうです。そして、彼（女）らは有名だとしたら、彼（女）らからは好まれたいし、あるいは、嫌われたくもないですね。ですから、粗暴になることは絶対に無いと思います…それは興味深いことでもあります。何故なら、こんなことが本当に見られるからです…論文を出すと、コメントが返ってきますが、その査読は匿名ですから、辛辣になり得るのです。」(20)

STEMにおける対人関係に関する他の話が示唆するところ、STEMでの協働が防御的にもなり得るのであるが、それは、リーダーが共同研究しようと待っている人たちに依存している、という意味であった。ここでもまた、生産性の重要性を想起させる。

「何人かの教授らが院生に対してかなり粗暴だという例について、私は聞いたことがあります。まあ、その教授らは押しが強く、院生への敬意が無いのです。…極端な例では、ある教授は院生にそういうことをして、その院生全員が出て行ったのです。…ですから、これは苦境です。つまり、親切であることは、必ずや、一層の関係づくりに繋がるでしょうし…同じ領域で研究する…人をもっと知るのに役立つでしょう。また、親切であることで…素晴らしい研究者なり科学者が寄って来るかも知れません…無情な人は、いつも相手を撥ねつけることでしょう。そしてこれが後々、研究の進展に影響するでしょう。…粗暴にしていれば、この領域で孤立するでしょう。結構なことです。」(10)

3.2.2 協働とインシビリティ、対人危害

協働という価値は、ほぼすべての面接において見えたし、それが、インシビリティおよび関連する危害の防御だという風に感じられるのだが、一方でそれ

は、加害と関係し得る専門知、生産性、独立独歩、威信という諸価値の存在の中で、存するものでもある。協働についての議論がインシビリティの事例にもなるのは、院生が、危害性のある対人的環境を去る機会を有さない場合であった。特定の人たちなり、特定の地位にいる人たちと研究しないといけないという必要性が故に、何らかの対人危害をチェック無きまま進行を許してしまう、というだったのであろう。対人危害を免れること、即ち、関係を壊すことなのだとするなら、全く以って失うものはあまりにも大きい、ということであった。こういう話が面接の中で共有される場合、院生らは、協働の重要性・必要性を語りながらも、続けて、自身なり相手が、対人危害に「耐え」ないといけないくらい、相手と共同研究をする必要があるのだ、と述べた。協働は大事で必要だと述べてから、続けて、この必要性ゆえに、危害に対して声を上げることが憚られることはあり得る、あるいは実際そうであった、と指摘する院生もいた（つまり、加害者にこれ以上関わると、その院生のキャリアが台無しにする、または、さほど劇的ではないにしても、新しい共同研究者を見つける壁になる。そんな風に利用されるかも知れない、という恐れがあるわけである）。ある参加者（31）は、こういうSTEMの世界の「二重性」を、「狂気」だと描写した。

3.3 専門知

専門知は、強力な価値として登場していた。それは、どんなキャリア段階であれ科学者の話の中で出て来たり、また、STEMの博士課程の学生としての喜び、そしてストレスを振り返る中で、出て来た。本節では専門知を探究する。つまり、専門知を「自我」として内部化することが、どんな風に一定のインシビリティ的加害の動機となり得るか、また、過程（例えば、専門家になる過程）として内部化することが、どんな風に防御的となり得るか、ということである。そして、STEMの博士課程の学生が、自身の専門知について問われた場合、如何に特に神経質になり得るか、ということである。加えて、加害またはインシビリティへの対応において専門知が果たしていた役割はどうかという、インシビリティ関係の話である。

3.3.1 動機づけのかつ必要な価値としての専門知

時として、学習意欲なり成長志向を語るために、専門知というのが参加者らに用いられていたが、多くの場合、専門知は、結果ないし特性として論じられていた。専門知というのが出て来たのは、参加者らが次のような人物を語る際であった。科学者の研究について（特に公けの場で）更に知見を深め、または更に詳細な事柄を引き出すために「詰問する」聴衆。院生がプロジェクトの専門家であるが故に院生を同僚として扱う教授。そして、「自我」を有する（つまり、自分は比較的知識が多いと信じる、語る、または示唆する）STEMメンバー。そういう人たちであった。また、参加者は、次のようなことを述べる際にも、専門知というのを持ち出して来た。専門的な意見なり支援の追求。話題になっている事柄について知っているという意味で、自分が「良い科学者」だと証明するプレッシャー。愚者のように見えることが大きなことになるが故の、愚かと思われることへの恐怖心。他者を貶めることを以って、賢人と思われる必要があるという感覚。そして、科学は本質的に難しく、それが出来るようになるためには真に「内実を知って」いないといけない故に、科学は難しくて然るべきという型枠化。そういうものであった。

多くの参加者は、自身の科学的領域について、絶えず一層の学びをしようという努力を語っていた。多くの参加者にあって、専門的であることが博士課程の集大成だ、という風にはっきり目されていた。下記のとおり、ある院生(120)は、専門知という価値を威信という価値に結びつけつつも、高度な知識・経験（専門知）の習熟の大事さを重視している。

「私にとって、修士課程は…学ぶことに重きが置かれていましたね、ええ、基本の類の教育です…ですが博士課程生[として]の期待値は格段に上がります。…先生方は、同僚くらいのレベルの達成を求めます。最終的には同僚になってもらいたいのです…先生方が…言うには…高く評価されるまで最終的な称号としてのPhDを留保するわけで…名前の後にその3文字がある何某も…確実に、同僚レベル代表になってもらいたい、ということです。先生方は、同僚と…同等の…レベルに達していない人にそれを授けた

くはないのです。」(120)

3.3.2 学習プロセスとしての専門知に対し、特性としての専門知

院生らが学習プロセスとして専門知を語る際、協働を引いてくることも多かった。あるいは、院生らが、むしろ結果ないし特性として（例えば、専門家であること）専門知を語る際、威信を引いてきて強調されることが多かった（以下の議論）。例えば、ある院生（18）が、専門知や威信を他の人がどういう風に用いているかを描写しつつ語るには、「[STEMは]非常に競争的な環境でして、『はい。私はPhDだ。私の方が賢明だ』とか『私はこういうことをしている。これが正しい方法だと思う。他の誰も…正しくない』と[思考して]いる傾向が多いです。下のある学生（62）の言は、STEMの課程における専門知について、2つの考え方の相違を説明するのに資する。それは、専門知が学習プロセスというより特性だという、意図せざる結果を描写している。

「それは、実際に答に辿り解こうとするのではなく、誰が正しくて誰が間違っているかになっています。また…賢明ないし知性的かどうか…を、その人が証明しないとイケない…というものになっています。」(62)

こういう専門知の表現は、学習についても好い研究環境づくりについても妨げている、と示唆する参加者もいた。

「愚鈍と思われる恐怖がある、というような気がします。恐怖は無い方が良いと思います。それは問題ですから。…私は大抵、一人で研究したものです。いつも賢明に思われること[について]気に病んでいるような人たちがいる、という風にと感じていましたから。ですから、学部生では出来たような質問を…しようにも出来ない、と悟りました。…私などは、実際、質問に答えてもらえるよう、愚鈍…に思われるという心地よさも感じたいです。…ですから…必ずしも研究室で最高の賢人ではないことの心地よさ[を感じて]もらいたいですね。…そしてまあ…質問をする際に謝る人も多

いです。『申し訳ございません。多分これは明らかなことなのでしょうが、これはどういう意味でしょうか』と。』(12)

次は、別の院生（11）が述べる、威信に絡み、かつ、プロセスというより結果と目される専門知のマイナス的な結果についてである。

「人と人とが…お互いに平等だと見るとすれば、[STEMにおける対人関係は]より良くなる、と思いますが、ヒエラルキー[の中]にある…限り…より良くなることは無いでしょう。何故か。まあ、彼らが別の人より上だと誰かが感じるなら、結局のところそれ自体、彼らがその人の扱い方を映し出しているということでしょう。…もしあなたがそんな風だとしたら、『そう、俺は合成法では…ちょっとしたものだ。こういうこともああいいうことも、本当に上手く出来るぞ』というような風に、その領域…ではあまり強くない人たちを見下し始めますよね。で、議論なんかが始まったら、あなたはそこに座って、『おお、彼らはこれについて全般的な外れな話をしている』などと考え込むでしょうね。…お互いに指摘し合う人の中から、粗暴なことばかり出てくるときは、そんな風だと私は思います。』(11)

3.3.3 専門知への神経質さ、専門知への社会化

専門知は、殊に参加者が神経質になる価値として現れていた。ある人が、何らかのことに關する別の人の間違いを指摘しないといけない際の、対人的な困難に關する話を、同じように参加者は共有していた。極端な例にあっては、ある院生（8）が、研究室の安全配慮が、対人的な苦行へと転じたということを語った。この話は、科学者が有する専門知の実践的・日常的重要性に焦点を当てるものでもある。ここでもまた、潜在的に有害と感じられていたものは、専門性の価値そのものではない（ここでは、装置の使用法の明晰な知識が、文字どおり爆発を防ぐものであった）。むしろ注目すべきは、ある人が専門知に如何に神経質になっていたか（つまり、指摘を受けることは自分にとって恥ずかしいことであった）、そして、専門知への神経質さが如何に対人的な加害を助

長していたか（つまり、如何に自分の専門知を擁護していたか）である。

「この…ポストドクは…水素添加反応をさせようとしていました。これは、正しくやらないと爆発します。そして[ある大学院生は]彼がそれを間違った風にやっていたのに気づき、彼に向かって…フロア全体を…爆発させるからそんな風にしないように、というようなことを叫んでいました…が、[その]男は、自分は…博士号を持っている…から、そうしているのだ…というようなことを言い続けていました。で…彼は、その大学院生から、自分に対して、やるな、と言われたこと…について、非難されたと感じたのです。何故か。彼の感じ方としては、自分が無能であるとか、自分がやっていることを分かっていない、というようなことを言われたわけです。…それで彼は「俺はそんなことをしようとはしていない」と叫び続けたのです。結局、彼らはアドバイザーに来てもらいまして…そしてアドバイザーと[ポストドク]が、まあ、それについて話し合いを始めました。それでまた彼は、非難されたと感じ…アドバイザーを「莫迦」呼ばわりしまして、それでまあ、事態はそんな風でした。」(8)

専門知を伸ばし、示すことは、STEMの博士課程ではすべて、かなり価値あるものとして現れていた。だが、面接参加者の中には、院生が専門知に如何ほど神経質になるかの度合いは個人差がある、と語る面接参加者もいた。ある院生(71)は、「健全」な自我と「不安定な」自我とを区別している。

「健全な自我を持つこともあれば、不安定な自我、あるいは、うーん、引き上げられた自我みたいなものがある、と思います。何故か。研究者として成功することになり、成功したSTEM人になるということは、一部として、自分自身の研究を価値づけることでして、成功する、または良い地位に就くためには、自分自身の研究を価値づけないといけないわけです。そう思います。ですが、博士号を取得しても、詐欺師症候群は立ち去らないので、そうして、自分の研究が重要だと考えていてもあまり確信を持てな

いなら、この不安定な自我を助長する可能性があると思います。で、それを証明しないといけない等と思います。また、その反面、うん、自分の研究が重要だと分かっているのなら、自分の研究が最重要だという、引き上げられた感覚へと導かれるかも知れません。まあ、『君は私と一緒に研究する特権がある』というような振る舞いですね。』(71)

参加者たちは、主要R01大学のSTEMの大学院生として、博士課程より前に、数年間STEMの修得を終えていた。院生にあって、専門知という価値への社会化は早くに始まり、長きにわたり進展するようであった。次の引用において、ある院生が力説している事柄は、多くの面接でも見いだされた事柄である。即ち、STEMにおける悪しき経験に関係し、インシビリティないし対人危害に神経質になり、また、そういうことへの肥沃な土壌になり得る、ということである。

「これは最初に、大学院に入る[年齢]よりも早く学んだと思います…高校か中学か。我々が科学をどう構築してきたのか、うん、まさしくその文化についてです。そうです。科学の授業では、通常、宿題なり課題があります。まあそこでのポイントとしては、正しい答があるということです。で、正しい答が得られないとしたら…良い気分ではないですね。それで…教室を出て…同じ類のことがありまして…研究という環境に入るや…正解へと努力するわけです。うん、それがどんな風に進むかは…自身の科学者としての成長と並行的だと思いますね。より良い科学者になればなるほど、自分自身でどういう風に物事をすべきか覚え、新しい技法を学ぶでしょうし、自身が科学者としてどう成功するか学びます。ですが、そうです。それとともに、プレッシャーもやって来るのでして、科学で成功を収めるということは、普通、正しいということと結びつきます。ですから…そういう類のことがこの文化に入り込んで来るのでして、[それが]この自己中心癖の元なのだ、と思います。」(9)

3.3.4 専門知とインシビリティ、対人危害

専門知がらみのインシビリティとしては、例えば、仲間なり同僚の「^{トラジャ・トロー}挑発」、他の人の知識ないし技能の無さに関する噂話、（例えば、クラスなり研究グループで）あまり知識が無いと思われる人の選別や対人的軽視、公の場での「^{グリル}詰問」である。参加者らは、基本的にそういう出来事について、標的または傍観者として語っていた。数名は、自分よりものを知らない同僚について軽蔑的に語っていたが、加害を是とする参加者は、ほぼいなかった。次の院生は、こういう専門知がらみの危害を普通のこととして引いている。

「もしあなたが、たまたま学部にて何か未修得のことがあったら、それとなく挑発的なことを言う者が確実に居ます…そういう者にしてみれば、何らかの形で何らかのことを知らないのは、科学者としての、また時によっては人[として]の価値へと翻訳されるのです…」(103)

別の院生（109）いわく、専攻内や比較的小さな研究グループ内での「噂話」は、誰それが無能だとか、チームの研究に関係する何かについて知らない人がいる、ということにまつある人の話であることが多い、ということであった。面接の中でのことであるが、この同じ院生は、自分たちが最も知的だと「証明」できるならば見えてくる社会資本について、強調していた。

「多分…別の分野なり別の職ではあまり無いように感じられる有能さに基づく地位…そういう要素があると思いますね。…歴史…学者の中で、歴史などを誰がたくさん知っているかに関して、コンテストの類があるのかどうか知りませんが、うーん、認められる知性や…技能…に関して気にする人はいますし、それが基本的に社会的地位のゲームみたいになっています。」(109)

この引用も、専門知という価値と威信という価値との関連を描き、STEMの専門家と目されれば授けられる地位について、はっきり語るものである。専門

知が威信をもたらすという共通した見方は、質問をすれば「莫迦」に見えるという恐怖に焦点を当てた話を、補完している。これに関して、数名の院生がSTEMのプレゼンテーションの恐怖を語っていた。

「まあ、別の[調査なり研究室]グループにおいて、自身の調査を発表する際だとか、総じてグループ全体に報告する際、極度に怖がり神経質になる人はいる。思うに、それはまあ、粗暴なことも有り…酷評も大いに有りだからです。」(12)

この種の「酷評」なり「詰問」は、専門知という価値のレンズを通して理解するのが有意義であろう。ここでもまた、各面接の中で、専門知は、プラスのな関係になる蓋然性（例えば、学習、好奇心）も、マイナス的な関係になる蓋然性（例えば、以下の話）も含みつつ、登場していた。

「誰かがプレゼンテーションをしているとき、[STEMにおける対人的な力学が] 最も顕著になるのだと私は思います。私のグループのある人から聞いたことがあるのですが…『グループ員たちが…この事柄について学び、思考を深化させるため、誰かがプレゼンテーションをしている際、特別タフでないといけない』というようなことが言われているそうです。しかし私は、それは正しくないと思います。恐ろしく難しい…質問をして、考えさせるという風に、卑劣で、粗暴で、偉そうにする必要など無いと私は思います。例えば…好奇心をそそるから質問をし、何かを明らかにするのに資するから質問をし、たぶん他の誰かが同じことを考えているが故に、もっと広く何かを知らしめたいが故に、質問をすれば良いのです。しかし、賢いように見せるためだとか、これについて異なる考え方をしていると見せるべく、[不] 必要に難しい問いをする、ただ単に難しい質問をする、ということなら、そんなものは必要ないと私は思います。」(11)

こうした「愛の鞭」なり「冷淡な」STEMの環境は、STEMに関する批評や議

論の中で、比較的広く認められてきた (Christe, 2013)。下記のとおり、ある院生 (2) が、そういう雰囲気なり文化の加害性についての議論を、不同意的に、要約している。

「もし批判を受け入れられないのなら [STEMに居るべきではない]、…それはまあ困難なことだが、誰かに難しい質問をすることは、彼 (女) らを、中身を、向上させることである。そんな風に考えている人たちは、間違いなく存在します。本当にそう信じている人たちがいます。うーん、私が思いますに、それは丁度、学術版のエリート主義一辺倒の一部分なのです。それは言わば、入場してきたあなたは、名門校出身で、今は立派な科学を執り行っている、ということです。さて、あなたが大きな質問をしますとします。あなたの質問が実際かなり尖っていて、卑劣で、誰かを愚かに見せようとするものであるとしても、『ああ、あの男は、まさしく難しい問いをしているのだ』と思われることになります。」 (2)

専門知という価値に関係するインシビリティの例として、他にあったのは、ある問について大学院生の答を信用せず、代わりに、単に同じ答を得るために教授にその質問をし、人を無視する、という学部生であった。専門知に関係するインシビリティのもう一例としては、他の人が何かを知らないとしたら、そんな者は救いようが無い、愚かである、はたまた遅れていると烙印を押す、あるいはそう信じる、という人たちがいた。ある院生 (5) いわく、要するに「STEMにて、他の人たちに対して粗暴になるのは、大方、彼 (女) らの研究を単に見下すだとか、例えば『俺は君を助けないよ。こんなこと知っておけ』と言ったりすることですね。そう思います。」

3.4 威信

威信という価値は、生産性や専門知という価値に比べるとあまり面接で出てこなかった。とは言え、威信というのが出て来たとき、それは被面接者にとって際立ったものであった。威信の上に成り立っている研究は比較的少ない。こ

のコードに含まれるのは、課程のランキングに表れる存在感や重要性、知名度であった。また、自分に敬意を払うよう他の人に納得させるべく、自分自身ないし自身のプレゼンテーションを高いものにしないとイケない、と感じるという意味での「自我^{エゴ}」の保持、自身の研究について認めてもらいたいという希求、そして、科学者集団に属しているという意味で「良い科学者」であるという証明であった。威信にまつわる対人危害の例としては、どこで学士学位を取ったかを聞き、STEM人脈の自慢話を交え、オリエンテーションなり1年目のクラスにて「人を値踏みする」ということがあった。専門知は、(学習のプロセスという部分よりも)結果なり地位だと見做される、そういった専門知という価値の顕在化は、威信という価値との組み合わせの中で、最もよく理解できる。

3.5 客観性

客観性という価値は、大事なものとして出てきてはいたが、生産性という価値や専門知という価値に比べると、出て来る頻度は少なかった。このコードに含まれるのは、「主観的な経験」よりも「動かぬ事実」を是とすること、明晰な答を持つに希求・期待すること、科学的手法の重要性を明言すること、黒か白かオール・オア・ナッシング(イエスかノーか、全部か皆無か)という考え方や、諸々の発見——対人関係における事象なり情動に関する結論を含む——が真理であるためには、反証可能なものでないといけない、という考え方や、社会問題には「正解」が無いがゆえに、同僚らは研究中の科学について論じるに留めるべきだ、という考え方を是とすることであった。客観性はまた、面接のデータの分析の仕方について参加者が面接者に尋ねた際に、出て来たものでもある。

客観性に関わり得るインシビリティの例としては、ある人が正しくない際に、ぶっきらぼうに接して然るべきであるが故に(このコミュニケーションのスタイルが粗暴であり、または時として加害的であるのかも知れないと述べる院生も居れば、このスタイルを好むと述べる学生も居たが)、「率直」または「辛辣」に語る、ということがあった。また、目下の事象に関係する、またはSTEM的コンテキストにおける対人的な出来事に関係する、ある人物の情動に対する明らかな軽視または無視をするということがあった。加えて、研究が社

会正義に関係する場合（例えば、成果物を、一定の障がいのある人向けに利用しやすくしようという努力だとか、STEMで女性が経験することの調査）、その研究を無視するということがあった。以下のとおり、ある院生（62）は、なぜ自分たちのプログラムの研究者が、研究に関して他所から反対されたり無視されたりしたのか、分析していた。

「こういう奇妙な…文化的…思想があると思います。つまり、STEMにあっては、こうした人間の問題に焦点を当てるなら、その科学にはあまり厳密性が無いはずだ、という思想があると思います…そこにはそういう側面があるのです。そこでは、『ええ、もっと良い科学だったら、それ自体が語り得るわけで…こういう対人的な、人格絡みの事柄をくまなく語る必要など無いだろう』という風になるのです。」（62）

客観性というものが最も頻繁に登場したのは、特定の行為がインシビリティになるのかどうか決め難い、と被面接者が述べる時であった。こういう関係は、対人危害への影響が絡む事例において、とりわけ顕著であった。例えば、対人危害についての基準を有するというだけでなく、より広くSTEMにおける客観性の重要性を、何人かの参加者が論じていた。ある院生（32）は、「ですから、本質的に、状況というものは客観的であり、客観的な基準が…あると思うのです」と語った。その人（32）は、粗暴な科学者についての説明責任を論ずる中で、再びこの客観性という価値について、「やはり、私は科学者として強調します。それは客観的に見て粗暴であり、受け手の目から見て…ただ単に粗暴だというのは 아닙니다」と力説した。以下のとおり、この同じ院生は続けて、STEMにおける対人危害に立ち向かうための防壁として、客観性という役割があり得るのだと示している。

「科学者たるや、[インシビリティだとか^{マイクロアグレッション}自覚なき差別]に関して話したいと思わないわけではない。ええ、彼（女）らは、それについて話さないのだ、と殊更に決め込んでいるわけではないです。彼（女）らは、人間的やりと

りと、存在すべき何かとを対置して、そこから主張を述べるのだと思います。生来的に論理的・合理的な科学者たる者、それを、些細なことと、大げさに語ることとを対置して、粹組み化しようと。それに割と躍起になっているのですね。そう思います。」

3.6 独立独歩

生産性という価値や専門知という価値と絡み合って、独立独歩という価値も登場していた。独立独歩としてコード化された回答としては、独立性という議論、単独で物事が出来るという希求ないし期待、自分自身のアイデアを自分のものにすること、または、自分自身の研究のアイデアを持つことの重要性、自分自身の意思の力が成功を確実にし得るという考え方、「第二のニュートンなりアインシュタイン」になるという想像、というものがあった。独立独歩というのは、訓練が（例えば、裕福な家庭の出身といったように）力のある男性に限られていたというSTEMの歴史から出てきたものだろう、という考え方も数名が共有していた。

「思いますけれど、最近のSTEMの文化も、実際、元とは言えば [かつての科学であり]、ある 1 人が、まさしく自分自身で進んで行き、紙の上で数学をして、本を読んで、何でも自分でして、まさしくこれほどの要件を手に行っている、というような場でした。…また、実際そういうわけではなくても、そういうのが出来るべきだという固有のプレッシャーが多々あると思います。科学は、かなり協働的な類の領域へと成長・発展しているのです。しかし、我々の長所を以って個別化されるべきだという必要性が、本当に個々で上手く為すようにと、我々を…苛立たせるのだと思います。で、我々は挑む。で、そこから我々の自我(エゴ)のようなものが出て来る、と私は考えます…私の経験では、私自身を含め、私が出会った科学者ほぼ全員にそういうのが見られます。そう思います。」(9)

独立独歩という価値に関係する対人危害の例としては、一部として、参加者

において独立してやれるだろうという研究室のリーダーの期待があったと思われる、その研究室のリーダーが院生への支援を留保した、ということがあった。また、設備が提供されない、リーダーがタイムラインの調整を拒む、というのもあった。このことは、障がい者に関する参加者たちの議論において特に顕在的であった。身体に障がいがあると自認するある参加者（71）は、例えばプロジェクトの完遂の遅延など、身体上のおそれに鑑みて一定の支援があつて、それについて謝意を強調していた。この人たちはまた、支援を受けられなかった障がい者の院生もいたこと、また、概して研究室では支援不足であること（例えば、台仕事をしながら座ることが出来るような、基本的な設備が欠落していることが多い）も述べていた。

3.7 STEMにおける諸価値と社会正義的な努力

インシビリティは「現代の」差別であるという枠に嵌まっている（Cortina et al., 2013）がゆえ、我々が好奇心を感じたのは、我々が見定めた諸価値は、STEMという場にあつて、社会正義的努力とどう交差し得るのか、ということであった。例えば、「科学上の生産性」が、個人の幸福よりも社会正義よりも大事だ、と多くの参加者が認識していたことに我々は気づいた。（a）社会正義的な努力や（b）社会正義的な研究への防壁として、生産性に高い価値が置かれている、という風に見立てる者も中にはいた。

「もし…STEM分野の…大学院生として、比較的社会的な、あるいは、ええ恐らく、比較的支援活動的ないしアクティビティ・ベース的な何かをもするとしても、全く経歴にもなりません。重要とは見做されないのです。ええまあ、履歴書の冒頭にちょっと飾るといふくらいのもですね…典型的なアドバイザーは、[社会正義的な努力]を有益だとは全く考えないのです。」（62）

専門知に関して何名かが表明していたのだが、自らが専門家だという自覚は、社会正義を学ぶ必要など無いという考え方に結びつきがある、ということ

であった。

「人は自分自身を、賢明だとか、進歩的だとか、等といった風に見立てているのです。で、他の人たちほど、ええ、[社会正義] について話す必要は無い、と思っているのです。」(41)

何人かの参加者の解釈・発言によると、STEMにおける博士課程においては、社会正義への障壁になり得るものとして、客観性というものが登場する、ということであった。客観性についての発言は、必ずしも、社会正義的な努力に対する意識的な抵抗に関係しているわけではなかった。実際のところ、客観性について、何人かの参加者の解釈の仕方としては、社会正義だけではなく、より広範に、感情、歴史、目下の事象、趣味・関心にまつわる議論への抵抗と関連していた。例えば、次の参加者(76)の言は、凡そSTEMにあっては感情の議論への意識的な抵抗があることに関し、複数の面接で聞いた事柄の要約になっている。

「間違っているかも知れませんが、STEMにあって、感情だとか、如何にも科学的だとは思われない事柄の話は、ある種、禁句である。そういう印象が私にはありました。また、そんなことを、ええ、そんな印象を持っていたのは、私だけではありません。」(76)

次に、別の院生(71)いわく、他の科学者たちは、客観性というものを、また。科学とは客観性だというよくある意見を利用することで、社会正義的関心を慎んでいると思われる、ということである。

『「私は科学者である。したがって、論理的に思考するのであり、人種差別主義者でも性差別主義者でも健常者優先主義でもあり得ないし、ここにありとあらゆることを入れ込むことも出来ない」…と考えている科学者は多いですね。そう思います。また、我々の社会にあっては、こういう科学観

は疑いようもなく、まああるいは、外的な力による影響を受けないのではないのでしょうか。そんなことは絶対的に真理ではないのですが。まあ、科学が人種差別主義的構造の中に組み込まれていることを、我々は知っていますし、科学の諸問題に対する我々の見方は、自分自身の偏見に影響されることを、我々は知っています。ですからまあ、時として否認というのが生じるのだと私は考えます。」(71)

この参加者いわく、STEM内での抑圧をめぐる会話から自分自身が外れるために、客観性という価値を自ら利用するわけではない。面接にあつては、社会正義的懸念事項を論じる参加者が、自分自身の不味い行ないよりも、他者の不味い行ないと思われる事柄について語ることが多かった。同様に、ある院生(62)は、対人的懸念事項や社会正義的問題を論じるのを他の科学者は嫌がっていると思われることについて、まとめている。

「また、多くの研究者たちは要領を得ないのです。研究者として修得した技量を用いることをせず、彼（女）らは、まるで他人事のように、『ええと、それは研究でない。科学でない。STEMでない。そういうのからは退散する』と言うのです。」(62)

3.8 対人的な加害を考える際の、科学者らの評価

科学者がSTEMにおける対人関係における振る舞いは、良い科学者になるかどうかにとって重要と思われるか否か、参加者たちに振り返ってもらうよう促した。参加者らにあつては、対人的な加害をする人でも良い科学者であると考えた人たちと、そう考えない人とで、おおかた半数ごとであった。この分断、そして参加者らの論理が、本研究にて現れた様々な価値の相対的重要性を、明らかにしている。

3.8.1 協働的な科学者は「良き」科学者である

先ず以って、参加者らの理屈をまとめると、科学における幸福、関係の健全

組織的なコンテキストにおけるインシビリティおよび対人危害：STEM 課程における諸価値の定性的研究性、社会正義に価値が置かれている、という示唆があった。協働は支援的なものとして登場し続けていた。

「科学者であるには、ただ単に研究をするというだけではないと思います。科学者であるということは、共同性を促進する能力、仲間と上手く意思疎通する能力、未来の科学者のメンターとしての力量と、大いに関係があります。これらはいずれにせよ、少なくとも、科学者として行なう研究と同じくらい大事です。科学者という職業だからです。それは…単なるロボットさえ出来ることではないです。…単に調査なり研究が出来るというのでは駄目なのです。で、思いますに、為すべきことは多々ありまして、つまり、そういうことはいずれも、良い研究者と言えるかどうかに関わります。」(5)

対人的振る舞いが、良い科学者だと見られるかどうかに影響するという言い方をする際、理屈としてあったのは、マイノリティの人たちの科学的貢献ないし機会が喪失される、(例えばマイノリティの学生に対する) 対人的交流の思慮の無さが、総じて新しい考え方を探究する意欲の無さのしるしとなり得る、そして、良い科学者とは、対人的な振る舞いが良いということを含め、社会への貢献をする人という解釈がある、ということであった。

3.8.2 …しかし、対人的な振る舞い以上に、生産的・専門的な科学者が「良き」科学者である

対人的な危害をしたからと言って、結果的に、宜しくない科学者だと目されることにはならない、という風に院生が語る際、往々にして、対人的な振る舞いとは別個に生産性を評価して良い、またはそうすべきだ、ということを言いつけていた。

「科学者としてどうか、と私が考えるにおいて、[対人的な振る舞いは]私にとって重大ではないです。そう思います。うーん。誰それが如何ほど人

として良いのか、あるいは、あるメンターなり研究主宰者として如何ほど良いのかに関しては、こういう風な別個の評価の尺度があるのだと思います。…そういう類の振る舞いがあったとて、人としての誰それを…私が重視することは無いでしょう…ただ…誰その技術的な能力の評価とそれとは分けたままにしますね。」(109)

科学者としてある人を評価するにおいて、何名かの参加者が重視したのは、技術的な力量および生産性であった。数名が、STEMの課程における権力の差異や、白人の優越性の存在をはっきりと思い起こした。以って、STEMにせよ科学者にせよ、不味い対人的振る舞いに直面しても、それに加担したままだ、ということであった。次の参加者は、幸福や協働といった価値よりも、生産性や専門知の方が上に来るということを振り返って、やり手の科学者に対人的振る舞いに関する「通行証」を渡している、という見方を表明している。この院生は、再び協働という価値を想起して、もしある者がやり手であっても、学生の研究を盗作するとするなら、「良き科学者」ではないであろう、と示唆していた。

「[対人的に不味い振る舞いをする科学者が、『良き科学者』たり得るのかどうかは] 良い問いですね。実際、そうでもないですが、その人が何をするか次第ですね。…私は、まさにそういう研究主宰者に会ったことはあります。これをどう言えば良いでしょうか。真剣で、まあ非常に感情的で、しかし、あまりに感情的なので怖いのです。だからと言って悪い科学者ではありません。まあそういう人たちは、最良の人間関係も、分かりませんが、人間的になるツールを持ち合わせていないのかも知れません。この領域には、人間的な人ではない人が多くいますから。うん。そういう人たちは良い研究者ですけれども、人との接し方を全く知らないのです。」(18)

次の参加者(76)の言は、我々の面接でよく見られたもう1つの考え方の要約となる。つまり、不味い対人的振る舞いをしたからと言って、誰かから「悪

しき科学者」と評価されることには繋がらないし、そういう蓋然性も無いけれども、こうした博士課程の院生は、STEMにおいて関係する規範を変えたいと思っている、ということである（例えば、感情なり幸福に関する会話、将来のメンティーにおける関係の健全性を重視するという選択）。

「私は時折、粗暴な人たちがどうやってこの分野の頂点に居るのか、不思議に思うことがあります。ただ…かなり情け深く、STEM以外も事柄もかなり支援してくれ、慮ってくれる教授に出会ったとき、それについて私はかなり感謝しているのですが、だからと言って同時に、それだけ良い科学者だとか悪い科学者だとか思うわけではありません。そういう一元的な閉鎖的…態度…や、感情について語ることも考えることもしない人…と、私は最終的に対峙できれば、と思っています。」(76)

4 議論

環境における諸価値が、インシビリティ（例えば、よく分からない粗暴さ）および関連する危害（例えば、明らかな粗暴さ）の理解に如何に資するか。その探究のコンテキストとして我々が選択したのは、STEMの博士課程であった。院生の話や認識からして、STEMにおける諸価値は、こうした環境においてプラス的な特性（例えば研究の促進）もマイナス的な特性（例えばインシビリティ）もどう表出し得るのか、ということの説明に役立つものであった。インシビリティは、大概、組織の規範に悖ることとして記述されてきた（Cortina et al., 2022）。我々が見いだしたのは、組織（即ち、STEM）の規範（即ち、「価値表現的な行為」（Bardi & Schwartz, 2003）としてのインシビリティ）に非常にそぐうようなインシビリティの例であった。先行研究（例えば、Cortina et al., 2022）同様、我々も、インシビリティがかなりコンテキスト的であることを見いだした。諸価値に関する我々の探究が文献的に寄与すべく、インシビリティという加害や、インシビリティにまつわる意味形成については、少なくとも部

分的には、環境における諸価値を通じて理解できることを、明らかにしている。環境における諸価値はまた、社会正義の努力への何らかの抵抗や、科学者らの評価の在り様についての説明に、資するところもある。大方の文化的諸側面と同じく、多数の面接にて登場した環境における諸価値は、向社会的行動とも、対人的・個人的なマイナス的な結果とも、関係していた。

4.1 交差する諸価値、STEMの環境変化の徴候

専門知、生産性、威信、客観性、独立独歩、協働、健康という価値が登場した。これらは、個々別々の価値ではありながら、一緒に作用すると考えてこそ、我々の理解は最高度に膨らみを持った。例えば、専門知（即ち、学習プロセス対獲得・^{バーサス}掌握されるべき地位）や生産性（例えば、科学的発見を促進するという希求の一部対地位の^{バーサス}象徴ないし金銭）は、STEM絡みの話によって、人によって、様々に見きわめられ解釈され得るわけで、そういう色々な態様について、威信というものが際立たせているのであった。健康というのもまた、生産性に関する議論の中で登場していた（つまり、気分が好い時に最良の仕事が出来るという考え故に、STEMの人は健康に留意すべき、ということ）。こうした正当化や型式づくりは、面接者が、臨床的コミュニティ心理学の院生として自己紹介するという研究的コンテクストにて、出て来るものであった。

科学者たちが対人関係の過ちをしても、「良い研究者」という地位が下がるわけではない、という院生らの振り返りは、協働や健康よりも生産性や専門知に価値を置くということを映し出していた。こういうことが示唆しているのは、STEMにおける価値の社会化を考えるのにも、博士課程が大学院生に授ける暗黙的・明示的メッセージを考えるのにも、ランキングというものが有用なのであろう、ということであった。課程、分野、STEMにおける価値観は、時間と共に変化する、と明言さえする参加者が数名いた。いわく、かつては独立独歩が比較的目立っていたが、今や、協働という価値が比較的浸透しているようである。「良い科学者」の評価にあって、多くの人が言い表したのは、STEMの価値観の社会化を変える役割をしたい、ということであった。こういう院生は、対人的な危害を犯す人たちを「良い研究者」だと想定する中での専門知や

生産性という価値について、想起していた。だが、生産性や専門知以上に、協働や健康という価値を考えたい、という希求を表明していた。

同様に、本分析にあっては、組織的な価値が当該組織における社会正義を抑えるために活用され得る例について、考察した。インシビリティは、「今日の」職場の差別であるという議論は為されてきたわけで (Cortina, 2008)、我々の探究は、社会正義的努力の議論をも含めており、本研究にて登場した諸価値が、STEMにおける社会正義的努力を妨げ得る（または支援し得る）という例を、本分析にあっては精力的に探した。例えば、生産性に関するいくつかの解釈は、多様性および包摂への努力など時間を割く価値無し、という議論の中で、呼び起こされたものであった。何人かの科学者は、専門知を「盾」として用い、差別といったような過ちを埋め合わせて余りある、ということ述べた。また、時として、抑圧に関する言説といったような「グレー」な領域のある問題が、STEMには不相応ないし不適切である（そういうのは反証不可能と思われるゆえ）という意味で、客観性は、解釈されていた。無論、諸価値は規範的なものではない。本研究の全員が、こういった組織な価値は社会正義的な努力の障壁だと解釈したわけではない。何人かは、社会正義的な努力に与するがゆえに、本研究で現れる諸価値を呼び起こした（最も顕著なのが、協働および健康）。かくして、STEMの人たちは、他の人たちが社会正義的努力を慎むために用いている価値について、かかる努力を逆に擁護するように解釈しているかも知れない（例えば、STEMにおける人種差別主義である。諸発見を促していた可能性のある科学者がいたのに、そういう人を排除して生産性の妨げになっていた、という解釈）。

4.2 ニュアンス的な価値、価値の取り込みの相違

あらゆる価値はニュアンス的であった。ある組織体における見方の多様さを反映し、同じ価値が、高い位置づけであり得るという以外に、得てしてマイナス的な形をとる、ということがあった。諸価値の解釈が個別的には違うことを、諸々の発見が映し出していた。例えば、生産性という価値は、ほぼ大抵、リスク要素として現れた。つまり、研究のため、または、研究していると見て

もらうために研究するというのが、他者を「見下す」、または、あまり研究してはいないと感じられる院生を排除する話の中で、出て来たのである。とは言え、諸発見が示唆するところ、STEMにおける生産性の重要性は、生産性が協働という価値を以って満たされる場合、支援的な要素にもなり得る。即ち、新奇性ないし有用性のある何かを発見する（生産性）よう動機づけられているがゆえに研究するというのが、STEMにて対人関係を以って研究し、それを維持したい（協働）という希求を際立たせた話の中で登場していた。概して協働は、潜在力ある支援の価値として現れた。しかし、他のあらゆる価値と同じく、協働には独特の「裏面」があった（つまり、ある参加者は、他の科学者なりチームとの協働にかなり価値を置いていたがために、インシビリティその他の対人危害を無視しようとしていた）。こういう協働の「裏面」は、STEMにおける構造的実践の機能——インシビリティや対人危害のある上下関係を無くし得る選択肢——へのヒントになる（諸価値以外に、STEMにおけるインシビリティに関与し得る諸要素の分析は、近日発表する）。STEMを「冷ややか」だとけなす（Christe, 2013）なり、もっと温和なものだと示唆してSTEMを擁護するというよりも、ニュアンスに関し、はたまた、STEMの諸価値がどう顕在化し得るかに関し、我々の諸発見は、STEM文化の豊かさを明らかにするものである。

本研究は、STEMの訓練というコンテキストの中に深く埋め込まれていると思われる諸価値を見きわめるべく、面接においても、面接横断的にも、生態学的アプローチをとった。だが当然にして、個々には相違が現れた。例えば、学習・成長に関係するものとしての専門知あり、対するは、如何ほど自分が物知りだと考えているかに係る^{自己}の保持に繋がるものとしての専門知あり、と。^{自己}に関わるものとしての専門知は、対人危害の話にて登場し得るけれども、学習・成長に関係するものとしての専門知はそうではない、という我々の発見は、インシビリティの予兆たる自惚れや自称を見いだした先行研究（Lippmann et al., 2009; Nordstrom et al., 2009）を映し出しているのかも知れない。本研究は、個々の院生に焦点を当てるといふより、もっと広範に、STEMという分野における諸価値の理解に向け、生態学的アプローチをとった。身勝手なSTEM

の大学院生は、対人的蔑視をする可能性が比較的高いと理解できるのだが、同じ学生が、専門知にかなり（恐らくは健康よりも）価値を置く環境に浸っていると見られるのであり、更にそこにおいては、所与の話題について十分な知識が無いことを理由に、他の学生を「見下し」ても文化的に許容され、STEMの博士課程という環境内では有意義だと想定されている、ということはある。そういう風な理解は、暴力的な加害に関する「行動における文化」^{カルチャー・イン・アクション}のモデルに従っている。つまり、文化が、乱暴が起こっても良いという状況を操縦するための「道具」（つまり、ある価値を犯す状況の扱い方）に加え、そういう「状況を提供する」のであり、そして人間主体が、関連する文化的方略（それには、攻撃的なことも含まれ得る）の実行の仕方に影響を及ぼす、というわけである（Lee & Ousey, 2011）。本分析は、個々の加害者の視点が無いとか、環境における諸価値だけで加害が予想可能だと想定する視点が無いとか、そういう主張ではない。むしろ本分析は、当該コンテキストに置かれた加害者なり傍観者を状況づけすることを、提唱するものである。

4.3 諸組織に向けての含意

STEM内を含め、インシビリティへの介入への関心は、組織的に高まっている（Clancy, 2020）。諸価値を変えるというのは荷厄介な介入になるものであり、また、価値の存在だけで加害が予想できるわけではないという現実（Lee & Ousey, 2011）に鑑みるに、専ら変えるべき価値に狙いを定めるのは、実務家の時間やエネルギーの使い方として宜しくないであろう。むしろ、諸価値を取り込むことこそが、エンゲージメント方略を経るのも含め、組織のプログラムにおける予防策を詠えるのに、有用であろう。例えば、組織の諸価値を、ワークショップにおける挿話なり、（リーダー向けのものも含め）メッセージの中で用いるのはあって良いし、組織の価値観を見きわめるなら、凶器化を許容する組織構造の在り様を根絶する手はじめとして、役立つことであろう。特定のコンテキストにおける個々人の経験を検証すれば、下方へと流れ、個々人の振る舞いにて顕在化する組織的傾向・優先性・価値を明らかにするのに有用であって、そのことについて本研究はモデル化している。上方の努力に焦点を当

て、体系的レベルでの構造に光を当てべく、個々人の行為を表出した情報として活用することは、予防・介入・維持的な努力の下支えになるであろう。例えば、STEM内にあって、初期予防への努力（つまり、インシビリティを生ずる前に制止しようという努力）にて力説するために、協働という価値は特段に重要であろう。そのためには、協働がどんな風であり得るか、あるべきかに関する向社会的な規範を想起することである。そして、健全な協働に向けた誘因づくりをすることである。組織における価値を変え、そして、常態的に差別されている人の声を含め、数多くの行為者からの情報を含んだ部門別方針（外部レイヤでの介入）を持てば、効果的に、個人レベルでの態度・行動に影響を及ぼし、インシビリティ的加害を防ぐのに役立ち得る。そうするためには、個別的な予防のアプローチ（例えば、同僚への親切に関する訓練; CDC, 2020）というより、部門レベルでの介入によって危害を防ぐための生態学的アプローチを要する。インシビリティ防止のための組織的チームづくり活動を求める声は他にもあり（Cortina et al., 2022）、この方略はそういう声を熟考するものである。

4.4 限界、将来への方向性

大方のインシビリティ研究は、インシビリティを犯した人または受けた人の探究である（Schilpzand et al., 2016）。対照的に今般の研究は、STEMの博士課程におけるインシビリティおよび関連する対人危害のコンテキスト化に供し得る組織特殊的な諸価値を探究・把握しようというものであった。大学院生に個別に面接した。そういうものとして、我々の研究には1つ限界がある。つまり、インシビリティおよび関連する危害が、ある環境を越えてどう広域的に存在するかというより、所与の関係性の中でどう固有的在に存在し得るのか、という分析については、我々の手法では出来なかった、ということである。最近のインシビリティ研究が示唆するところ、職場におけるインシビリティの発生は、ほぼ、同じ関係性の中で起こるということである（Taylor et al., 2022）。将来の研究にあっては、特殊な環境におけるインシビリティだけでなく、所与の環境における特定の一対その他の関係におけるインシビリティの発生をも検証すべきである。所与の組織における一対その他の関係を横断して存在しそうな

バリエーションを把握することは、予防のための研究を前進させるであろう。この研究を他の米国内外の大学へも拡張するなら、一般化に向けても役立つであろう。

STEMの博士課程の内側を含め、組織におけるインシビリティおよび関連する対人危害がはびこっていることについては、諸価値だけで完全に説明できるものではない。この限界は、例えば、米国南部の暴力（Lee & Ousey, 2011）の完全な説明を試行する（往々にして不首尾）「諸価値としての文化」モデル批判に似ている。また、STEMの組織内にあっては、課程の方針、つくられた環境、表現物が、いずれも影響力を持ち得る。いくつかの例にあって、本研究における諸価値は、構成主義的な思考を映し出すものであった（例えば、一定時間数研究するということ）。この構成主義的研究の追求するのは、説明や予測や統制の提案をするというより、インシビリティおよび関連する対人危害に関する組織の構成員の解釈も、組織的コンテキストも、もっとよく分かろうとすることであった。最後に——また、同様に——ここで特記したいのは、この面接のサンプルは、STEMにおける対人関係についての面接調査に、自薦での参加者で成り立つものであった——この自薦でのサンプルは、必ずしも全STEM院生を代表するものとは言えない（例えば、参加者は、対人関係の省察に比較

-
- 4 [訳注]訳者は、この翻訳作業を通じて次のような想いを巡らした。成果へのプレッシャーが甚だしく押し掛かるSTEMの世界にあって、リーダーはメンバーに期待するところが往々にして過剰になってしまうのであろう。フェファー＝サラシックの言葉を借りるなら、“人的資源依存”の状態になる。言うまでもなく、この資源は、利用する者にとって特段に不確実な動きをするし、余計にスラックを持つわけには——集団の士気にも関わり——行かないために、半ば為すすべもなく、インシビリティによる威嚇を以って不確実さに対処せざるを得なくなるのではないか。そしてそのことは、往々にして、逆に不確実さを助長する。このような、“人的資源依存”およびそれによる弊害は、STEM界に限らず、いわゆる成果主義を暫く是としてきた日本の諸組織でもなかなか広く——「パワハラ」、「セクハラ」と表現される諸事象として——顕在しないし潜在しているのではないか。だとしたら、より根本的に、“人的資源依存”を生ぜしめるメカニズムに対し、研究にあっては眼差しを向け、実践にあってはメスを入れないといけないであろう。訳者は、そうした課題をリーダーシップ論にも取り入れるべく、今後の研究課題にしたいと考えるものである。

的関心があるのかも知れないし、STEMの対人関係に比較的関与的であり、または献身的であるのかも知れない) ——ということである。⁴

〔以下略〕